

研究論文

発達障害児の運動を中心とする自由遊びの場に対する 保護者とトレーナーの捉え方

松山 郁夫* ・ 中村 理美** ・ 永富 達也*** ・
井上 伸一* ・ 坂元 康成*

Recognition of Parents and Trainers in the Free Play by Physical Activity for Children with Developmental Disorders

Ikuko MATSUYAMA*, Rimi NAKAMURA**, Tatsuya NAGATOMI***,
Sinichi INOUE*, Yasunari SAKAMOTO*

【要約】

発達障害児の運動を中心とする自由遊びの場に対する保護者とトレーナーの認識を明確にするために、質問紙調査における記述内容を検討した。学生トレーナーは子供達がどのような遊びに関心に向けているのかを観察しながら働きかけていること、本活動は参加する子供や大人全員の居場所としての機能を果たし、対象児に限らず、その家族や学生トレーナーの健康を促す側面があること、対象児の社会性が育っていること等が考察された。

【キーワード】

発達障害児, 運動を中心とする自由遊び, 対象児の保護者, 学生トレーナー

1. はじめに

平成19年度に、地域において発達障害児の余暇活動に対する支援があまりなされていないため、発達障害児の保護者から、放課後に安心して遊べる場を作ってほしいとの要望が多数あった。このため、主に佐賀大学本庄キャンパス体育館で、年間10回から20回程度、発達障害のある幼児や小学生に対して、運動を中心とする自由遊びの場を設定し、学生トレーナーが支援をする活動（通称：ウルトラマンクラブ）を継続して開催してきた。その中で、発達障害児への支援のあり方を中心に検討を進めてきた。

発達障害児に対する自由遊びの場を継続する中で、次のことが示唆されている。

平成27年度には12回（参加児延113名）、平成28年度には11回（参加児延77名）開催した。毎回、自由遊び終了後に実施するカンファレンスにおいて、運動学・社会福祉学・障害児心理学・特別支援教育等の視点から教員が学生トレーナーに助言指導をした。学生トレーナーは、対象児の興味や関心を捉え、自発性を引き出すために受容的態度で接するように心がけるようになり、対象児は興味や関心がある遊びに楽しみながら取り組むようになった。このため、運動を中心とする自由遊びが対象児の自発的な遊びに発展し、対人交流によって社会性が向上することが認められた。

運動を中心とする自由遊びの場は、居場所としての性格を有し、心理的支援の形態に個別心理療法と集団心理療法の両方の要素があるため、対象児に応じた支援の調整がなされ、治療教育と日常生活への支援が同時になされる。また、学生トレーナーの支援には、対象児へのエンパワメントアプローチの要素がある。対象児をエンパワメントする他者との信頼関係を構築するため、その自発性、意思表示、対人交流、遊びへの集中、遊びの質が向上する。さらに、対象児を支援する学生トレーナーをエンパワメントする要素もある（松山・中村・永富・井上・坂元）。

*佐賀大学教育学部 **西九州大学子ども学部

***NP0法人スポーツフォアオール

平成27年度と28年度の2年間の活動を検討すると、発達障害児の余暇を支援する際、その興味や関心に視点をあて、受容的態度で接することが対象児の遊びが増えるように作用していた。また、学生トレーナーは、運動を中心とする自由遊びの場で、対象児である自閉スペクトラム症児（以下、「自閉症児」と記述する）へ働きかける際、「自律を考慮して働きかけること」、「自発性を引き出すこと」、「受容的態度で接すること」、「安全に気を配ること」、「対象児の理解を深めておくこと」、「コミュニケーションが成り立つように働きかけること」と多岐に亘って配慮している。つまり、学生トレーナーは、対象児が運動を中心とする自由遊びを楽しむことができるように働きかけている。また、自閉症の障害特性を考慮しながらも、ストレングス視点から支援している（松山・中島, 2016）。

平成29年度には10回（参加児延71名）開催した。自閉症児自身における表象能力に応じた遊びや対人交流を継続的に展開し、周囲で起きている状況を観察して、模倣しながら様々な遊びを楽しんでいること、運動を中心とする自由遊びは、その表象能力を高め、発達を促すように作用することが示唆されている（松山, 2017）。

これを踏まえて、対象児の表象能力と運動を中心とする自由遊びの内容との関連を検討した結果、表象能力に応じた遊びや対人交流を継続的に展開しながら、周囲で起きている状況を観察して模倣しながら様々な遊びを楽しむようになり、対象児同士によるサッカーやドッジボール等の集団遊びが見られるようになった。そのため、運動を中心とする自由遊びは、対象児の表象能力を高め、集団遊びを増やし、発達を促すように作用することが明確になった。また、保護者へのカウンセリングを通して、対象児が安心して遊んだりその社会性を高めたりするために、放課後の居場所である余暇支援の場に対するニーズの高さが浮き彫りになった。さらに、知的障害の有無に関係なく、運動を中心とする自由遊びの場において、対象児に対する支援に使用する心理社会的アプローチの技法は、持続的支持と直接的支持が中心になると考えられた（松山, 2019）。

平成30年度には15回（参加児延101名）開催した。毎回、複数の参加児が自由遊びの中で、サッカーやドッジボール等に自発的に取り組むようになり、対象児同士の交流が多く見られるようになった。このように、自発的な遊びや集団での遊びに発展することが多くなったため、対人交流によって対象児の社会性がどのように向上するのかを検討している。

特に、適応行動のさらなる向上を促す働きかけと、問題と見られる行動を改善するための両ケースに対する働きかけについては、心理社会的アプローチにおける介入時の技法のうち、傾聴、受容、はげまし、共感的理解等による持続的支持、ワーカーからの意見や態度の表明等による直接的支持からなっている。したがって、知的障害の有無に関係なく、運動を中心とする自由遊びの場において、対象児に対する支援に使用する心理社会的アプローチの技法は、持続的支持と直接的支持が中心になることが明確

表1 令和元年度発達障害児の運動教室の参加状況（単位：人）

開催日	対象児				兄弟姉妹	参加児計	学 生
	幼 児	小学生	中学生	計			
第1回 5.13		3	1	4	3	7	11
第2回 5.27		2		2	2	4	11
第3回 6.10		5		5	4	9	7
第4回 6.24		5	1	6	5	11	10
第5回 7. 8		5		5	6	11	9
第6回 10.17	1	5	1	7	2	9	9

第7回	10. 31		5	1	6	3	9	18
第8回	11. 21	1	5	1	7	2	9	8
第9回	12. 5	5	3	1	9	1	10	9
第10回	12. 19	2	4	1	7	4	11	9
合 計		9	42	7	58	32	90	101

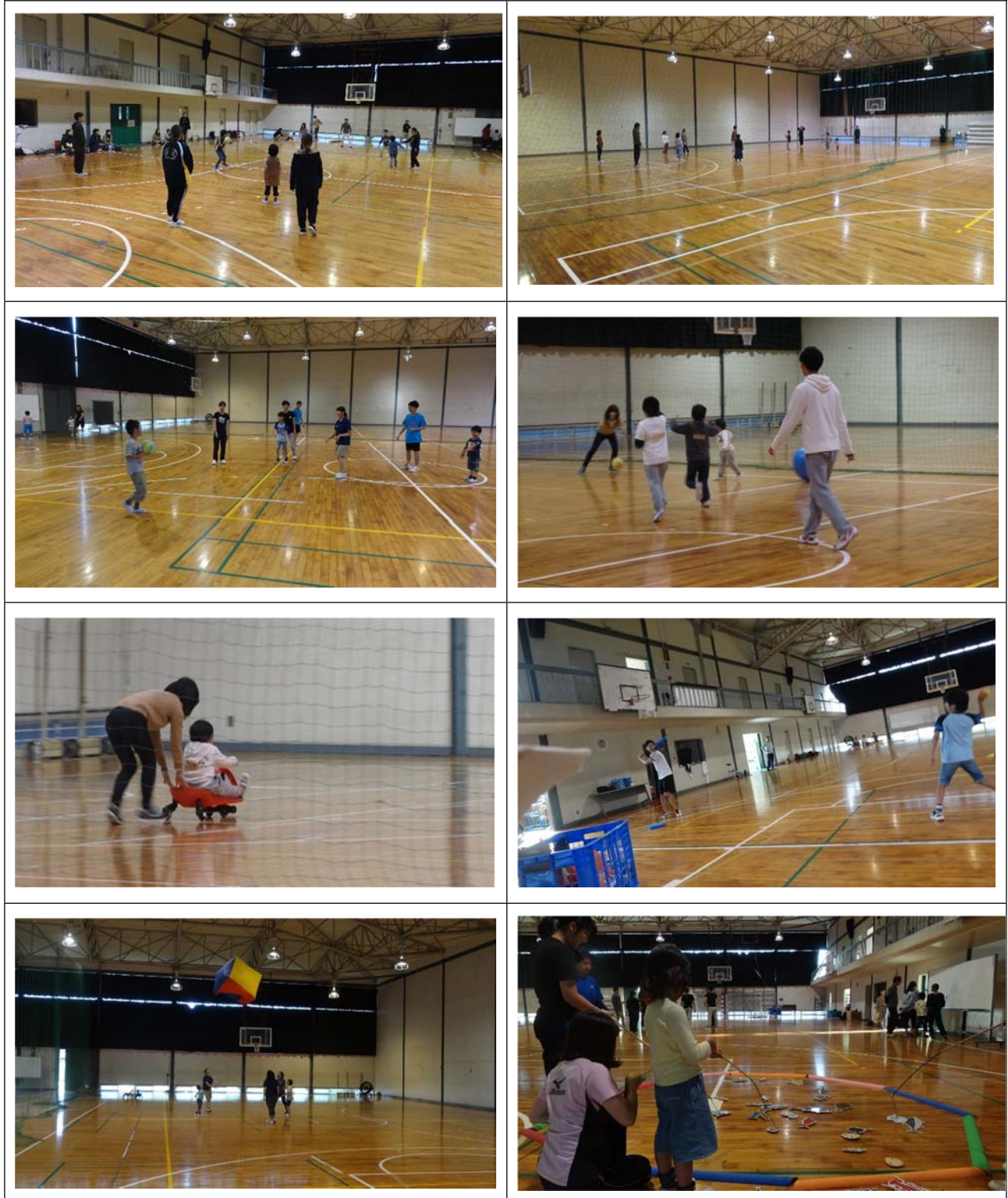


図1 発達障害児の運動を中心とする自由遊びの様子

にされている（松山・中村・永富・井上・坂元, 2020）。

学生トレーナーは、活動を通してさまざまな気づきを得て、対象児に対する安全管理、および体育館の環境整備にも気を配っている（松山・中島, 2016）。対象児の自主性を尊重した運動遊びができるように、プラズマカー、フロート、エアボール、ディスクッター、ドッジビー、輪投げ、ドレミマット、魚釣り、バランス平均台等、様々なレクリエーション用具を体育館に配置し、子供が自由に遊びを選択して活動できるような空間を設定している。

令和元年度には10回（参加児延90名）開催した（表1）。運動を中心とする自由遊びの場において、子供達は和やかな雰囲気の中で遊んでいる（図1）。学生トレーナーは、対象児が自発的に選択した遊びを楽しめるように働きかけるとともに、子供同士がぶつからないように気をつけたり、水分補給をさせたりして、対象児に対する安全管理にも留意している。特に、対象児が好むプラズマカーやエアボールで遊ぶ場合、移動範囲が広がるため、体育館の真ん中を仕切ってプラズマカーの使用可能区域、ボールを使った活動区域に分けている。なお、対象児が集中して遊ぶことができる時間を考慮し、運動を中心とする自由遊びを行う実質的活動は1時間程度に設定している。

発達障害の中でも、特に自閉症児が周りとのコミュニケーションを作りにくいのは、時間と空間のなかに自分自身を位置づけることができないことによる（Wing, 1996）。また、自閉症者のコミュニケーション能力に関する障害や社会的認知の障害は、対人関係の形成に困難をもたらし、そのことで不適応を生じる可能性が高い（小林, 1999）と言及されている。

しかしながら、自閉症児等の発達障害児の余暇を支援する際、その興味や関心に視点をあて、受容的態度で接することで対象児の遊びや他者との関わりが増えていく。保護者は子供の社会性を高めていくために放課後の居場所を求めており、地域における放課後の居場所である余暇支援の場に対する高いニーズがある。これらのことから、対象児の保護者と学生トレーナーにおける運動を中心とする運動遊びの場に対する捉え方を検討することで、発達障害児に必要な放課後の居場所のあり方を明らかにしていく必要があると考えられる。

以上より、本研究の目的は、発達障害児の運動を中心とする自由遊びの場に対する保護者とトレーナーの捉え方について検討することである。

2. 方 法

平成30年度の運動を中心とする自由遊びの活動に2年以上参加している学生7名、および2年以上参加している対象児の保護者7名に対して質問紙調査を実施した（記入日：平成30年12月19日）。

7名の学生トレーナーに対して、「ウルトラマンクラブに参加した理由」、「ウルトラマンクラブで子供と一緒に遊んでみて感じたこと」、「ウルトラマンクラブで子供が好きな遊び」、「ウルトラマンクラブに参加しての感想」の質問項目に対して箇条書きで回答してもらった。

2年以上参加している対象児の保護者7名に対しては、「ウルトラマンクラブでの子供の様子」「ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子」、「ウルトラマンクラブでの感想」の質問綱目に対して箇条書きで回答してもらった。

また、平成28年度に、運動を中心とする自由遊びの活動に2年以上参加している対象児の保護者4名に対して、「ウルトラマンクラブでの活動の様子（平成27年度の様子・平成28年度の様子）」、「ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子（平成27年度の様子・平成28年度の様子）」、「生活においてどのような支援があればいいと思うか」、「ウルトラマンクラブに対する感想」の4つの質問項目に箇条書きで回答してもらった（記入日：平成29年1月11日）。

以上のすべての質問紙調査への協力については、倫理的配慮として、事前に学生トレーナーと保護者

に対して、対象児に関する記録等は発達障害児への支援に関する研究のみに使用すること、および使用する際に個人のプライバシーは保護されることを詳細に説明し、同意が得られた場合のみ、記入してもらうことにした。

3. 結 果

運動を中心とする自由遊びの場に参加する動機については、学生トレーナー7名のうち、4名は「子ども発達支援士」（佐賀県内の大学における協同の取り組みによる認定資格）の取得が目的であったが、3名は発達障害のある子供とかかわる体験を求めていたからであった（表2）。

子供と一緒に遊んでみて感じたことについては、25件の回答があり、内容で分類すると、多い方から、他児や学生トレーナーとの関わり（8件（32.0%））、学生トレーナーが得たこと（7件（28.0%））、遊びの質の向上（6件（24.0%））、子供の発達や成長に関すること（4件（16.0%））であった（表3）。

子供が好きな遊びについては、プラズマカーで追いかけて、魚釣り、ドッジボール、サッカー等、集団での運動遊びが多くあげられていた（表4）。

参加しての感想については、子供達と一緒に遊ぶことが楽しかったとの回答が多かった（表5）。

表2 学生トレーナーに対する質問：ウルトラマンクラブに参加した理由

- ・楽しそうに子供達が遊んでいる様子を見て参加したいと思った。
- ・福祉に興味があったため、知的障害や発達障害のある子供他とかかわりを持ってみたいと考えたため。
- ・発達障害のある子供と直接関わりたかったから。
- ・子ども発達支援士を取得する実習として参加した（4名の回答）

表3 学生トレーナーに対する質問：ウルトラマンクラブで子供と一緒に遊んでみて感じたこと

- ① 他児や学生トレーナーとの関わり：8件（32.0%）
 - ・子供同士のやりとりが多々見られ、自主性に任せてもスムーズに遊ぶことができていた。
 - ・口数が増え、学生トレーナーや他児に話しかけることが増えてきた。
 - ・他児と遊ぶ時間が多くなってきた。
 - ・他児に自分が遊んでいた遊具を譲る場面が増えてきた。
 - ・自分で想像していたよりも人とかかわることが好きな子供ばかりで、とても楽しむ遊ぶことができた。
 - ・毎回参加していると、子供達と仲良くなってきたように感じる。
 - ・運動を中心とする自由遊びの中で子供達が遊ぶと、子供同士で関わりあって遊ぶようになることが多くみられた。ウルトラマンクラブの魅力だと思った。
 - ・一緒に過ごす時間が長くなってくると、子供の方から話しかけてくることが多くなった。
- ② 学生トレーナーが得たこと：7件（28.0%）
 - ・注意するときの言い方が難しかった。単に「ダメ」と叱るのではなく、「あの子が困っているからやめようね」等、諭す方が言うことをよく聞いてくれた。
 - ・子供達が遊びを楽しめるように働きかけていたら、いつの間にか学生トレーナーも子供達以上に楽しんでいるように感じた。
 - ・1対1で関わることで、よく話もでき、子供の変化がよくわかった。

・発達障害のある子供に対して支援をしてあげようという気持ちで参加したが、支援をしてあげようという態度はよくないように思った。

・自分自身も楽しく活動でき、参加した4年間は有意義な時間だったと感じる。

・子供達はいつも楽しく遊んでいるため、子供らしくて障害があるようには見えない。

・ドッジボールをしているときは、保護者もよく見ていて、子供を応援したり声かけしたりしていた。

③ 遊びの質の向上：6件（24.0%）

・遊びのルールを考える様子が多くみられるようになってきた。

・遊んだ後、後片付けまできちんとするようになった。

・ドッジボールを始めるときに、子供達がそれぞれのルールを提示してくるため、ルールを決めるのがたいへんだった。

・子供達はいろいろな遊びに興味を持っていて、自分が考えつかないような遊び方をする様子が多々見られた。

・年間を通してみると、集団遊びを楽しむ子供が多くなり、子供達の社会性が育まれているように思える。

・ウルトラマンクラブが終わって帰るときの子供達の表情はいつも満足感で一杯だった。運動を中心とする自由遊びや集団遊びの大切さが実感できた。

④ 子供の発達や成長に関すること：4件（16.0%）

・子供達は遊んでいるときは元気で楽しそうな様子である。

・何度も参加して子供達と遊ぶ中で、子供達が成長していく姿を見ることができた。

・子供の成長をまじかに見ることができてよかったと思う。

・1年間定期的にウルトラマンクラブで子供達と接していると、その成長を感じることができた。

表4 学生トレーナーに対する質問：ウルトラマンクラブで子供が好きな遊び ※数字は回答数

プラズマカーで追いかけて	7	魚釣り	7	ドッジボール	6	サッカー	5
ホワイトボードでのお絵描き	5	大きなバルーンを投げたりぶつかったりして遊ぶこと					
追いかけて	1	的あて	1	輪投げ	1	ドッジビー	1
				ソフトテニス	1		

表5 学生トレーナーに対する質問：ウルトラマンクラブに参加しての感想

子供と一緒に楽しみながら参加ができたのは、自分にとっても大事な体験だと思った。

知的障害や発達障害があっても、楽しく遊ぶ姿から子供らしいと思ったことが多々あった。

子供達と一緒に遊ぶことが楽しくて4年間も経っていた。

いつも子供達と一緒に遊ぶことが楽しかった。

1年間を通して参加すると、子供達の成長を見ることができた。

保護者に対する質問について、運動を中心とする自由遊びの場に参加する子供の様子については、学生トレーナーとの関わり（5件（38.5%））、遊びの様子（8件（61.5%））であった（表6）。保護者は子供が、学生トレーナーとの関わりや遊び自体を楽しんでいると認識していることが示唆された。ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子では、家の手伝いを進んでしてくれること、ウルトラマンクラブで遊んだことについて話をする、熟睡出来ること等があげられていた（表7）。また、ウルトラマンクラブに対する感想には、学生トレーナーが遊び方を教えてくれるのが子供にプラスになっている。対象児も兄弟姉妹も学生トレーナーの温かい関わりのおかげで楽しく参加できている。子供達にとっても良い活動なので回数を増やして長く続けてほしい。自由に遊べる場が子供にとっても親にとってもいい。療育

センターでの療育から小学校での集団生活につながる活動としての役割も大きい。保護者同士の情報交換もでき、子供と保護者の居場所として大切な場となっている旨、記述されてあった（表8）。

表6 保護者に対する質問：ウルトラマンクラブでの子供の様子

① 学生トレーナーとの関わり：5件（38.5%）

- ・学生トレーナーとも遊ぶことができ嬉しそうです。
- ・学生トレーナーとのびのびと自由に遊んでいます。
- ・学生トレーナーと野球やテニス等を楽しんでいます。
- ・最初は一人で黙々と遊んでいましたが、最近、学生トレーナーと上手く付き合えるようになってきました。
- ・子供達とは野球やテニスはできないけど、学生トレーナーとであればボールをバットで打ったりソフトテニスをしばらく続けたりすることができるようになってきました。

② 遊びの様子：8件（61.5%）

- ・すごく楽しく遊んでいます。
- ・非常に楽しそうに遊んでいて、うれしく思います。
- ・自由に遊ぶことができ嬉しそうです。
- ・とても喜んで行っています。
- ・人気のあるプラズマカーの順番を待ったり、次の子供に譲ってやったりしています。トラブルを回避しているようにも見えます。
- ・お兄ちゃん（対象児）も妹も楽しんで参加しています。
- ・「楽しかった？」と尋ねると「楽しかった」と答えます。
- ・毎回楽しみにしていて、「なぜ毎週ないのか」と言います。

表7 保護者に対する質問：ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子

沢山身体を動かしたため充実した様子で、家の手伝い等を自分から進んでやってくれます。

ウルトラマンクラブ終了後、バイオリン教室に行きますが、運動の影響が集中して取り組むことができます。

ウルトラマンクラブ終了後は、元気に明るく過ごしています。

リフレッシュできているようで、夕飯もよく食べてよく眠ります。

兄弟と一緒に、ウルトラマンクラブでのことを思い出して話をよくしています。

他機関の言語訓練で、絵日記で一週間の振り返りをするとき、ウルトラマンクラブでの活動を思い出して楽しく話しています。

いつもは寝つきが悪いのですが、ウルトラマンクラブがあった日は早めにぐっすりと眠ります。

楽しかったためか家でも機嫌がいいです。また、よく眠ります。

機嫌がよく、「次もいく」と言います。今回が今年度最後と言うと不満そうでした。

表8 保護者に対する質問：ウルトラマンクラブに対する感想

子供達にとって、とても良い活動だと思います。

もう少し回数を増やしていただけると嬉しいです。

このように自由に遊べる場があるのが子供にとっても親にとってもいいと思います。

いろいろな遊具があるだけでなく、学生トレーナーが遊び方を教えてくれたるするのが子供にプラスになっています。

対象児も兄弟姉妹も学生トレーナーの温かい関わりのおかげで楽しく参加できています。長く続けていただきたいと思います。

療育センターでの療育から小学校での集団生活につながる活動としての役割も大きいと思います。

本児にとっていい経験になっていると思います。

子供達が楽しみにしているので、是非継続してほしい。

学生トレーナーと遊ぶことができ、頼りにしています。

保護者同士の情報交換もでき、助かっています。子供と保護者の居場所として大切な場です。

運動を中心とする自由遊びの活動に2年以上参加している対象児の保護者4名に対する質問紙調査において、ウルトラマンクラブでの活動の様子（平成27年度の様子・平成28年度の様子）から、平成27年度に比較すると、集団での運動遊びが増えたこと、ドッジボール等のルールを理解して遊ぶようになったこと、学生トレーナー・子供達と一緒に遊ぶことが増えたこと等が記述されていた（表9）。ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子（平成27年度の様子・平成28年度の様子）については、2年目になるとウルトラマンクラブで遊んだことや楽しかったことを話してくれるようになったとの記述が多かった（表10）。「生活においてどのような支援があればいいと思いますか」には、見通しを立てた筋道だった行動ができる支援やトラブルがあった際に人間関係を調整する支援があげられていた（表11）。ウルトラマンクラブに対する感想には、子供達だけでなく、学生トレーナーとも一緒に遊ぶことで遊びが広がること等が記述されていた。

表9 保護者に対する質問：ウルトラマンクラブでの子供の様子

平成27年度の様子	平成28年度の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・魚釣りやストラックアウト等、一人で遊ぶことの方が多かった。 ・プラズマカーに乗ってスピードを出して楽しむ等一人で遊ぶこと、本児が主導して学生トレーナーと1対1で遊ぶことが多い。 ・一人でプラズマカーに乗って遊ぶこと、学生トレーナーと一緒にバドミントンを楽しく遊んでいた。 ・毎回、楽しく参加していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・サッカーやドッジボール等、集団で遊ぶことを楽しむようになった。 ・子供達と一緒にドッジボールを楽しむことができるようになった。ルールを理解して遊ぶことができるようになり、成長したと思う。 ・学生トレーナー・子供達と一緒にドッジボールに楽しんで取り組むことができるようになった。 ・今年度、1回参加するのを忘れ、大泣きしてしまった。相当参加するのを楽しみにしているようで、いろいろな種類の遊びがあるため楽しみにしているように感じる。

表10 保護者に対する質問：ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子

平成27年度の様子	平成28年度の様子
<ul style="list-style-type: none"> ・よく身体を動かしたため、充実した様子。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ウルトラマンクラブで沢山楽しんで、楽しかったことを話し始める等、充実した様子。また、次のウルトラマンクラブで遊びたいことを話す等、活動を楽しみにしていることが窺える。

<ul style="list-style-type: none"> ・身体を沢山動かしてすっきりとした様子。 ・落ち着いている。 ・毎回楽しめているようで満足しているように見える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・昨年度と同様に、身体を沢山動かしてすっきりとした様子だが、ウルトラマンクラブで遊んだことや楽しかったことを話してくれるようになった。 ・ドッジボールの様子等、楽しかったことを話すようになった。 ・毎回楽しかったようで、次は「〇〇したい」と話しかけてくる等、かなり楽しみにしている。
--	---

表11 保護者に対する質問：生活において求めている支援

<ul style="list-style-type: none"> ・見通しを立てたり、物事の道筋を考えたりして行動できるような支援があればいいと思う。 ・何かトラブルがあった際に、人間関係が円滑にいくような支援があればいいと思う。

表12 保護者に対する質問：ウルトラマンクラブに対する感想

<ul style="list-style-type: none"> ・毎回とても楽しみにしている。 ・固定したメンバーでドッジボールを楽しめること、お友達と会えること、学生トレーナーがフォローしてくれることがとても有難いと思う。 ・子供達だけでなく、学生トレーナーとも一緒に遊ぶことで遊びが広がり、よかったと思う。

4. 考 察

学生がトレーナーとして運動を中心とする自由遊びの場に参加する動機は、「子ども発達支援士」認定資格の取得、発達障害のある子供とかかわる体験を希望していたため、発達障害児と遊ぶ体験をすることを求めている。子供達と一緒に遊ぶことが楽しかったとの感想が多かった。また、学生トレーナーは子供と一緒に遊ぶ体験から、他児や学生トレーナーとの関わり、子供との関りを通して得られたこと、遊びの質の向上、子供の発達や成長に関することに関心を向けていた。子供が好きな遊びについては、プラズマカーによる追いかけっこ、魚釣り、ドッジボール、サッカー等、集団での運動遊びが多くあげられていた。

本活動では、対象児が自分の意思で運動種目を選択して遊ぶという、自由遊びを重視しているため、学生トレーナーが対象児の状態を広く捉えながら支援することになる（松山, 2013）。したがって、学生トレーナーは子供達がどのような遊びに関心を向けているのかを、よく観察しながら働きかけるようにしているものと考えられる。

保護者の記述で多いのは、運動を中心とする自由遊びの場に参加する子供の様子について、学生トレーナーとの関わり、遊びの様子に関することであった。このため、保護者は子供が、学生トレーナーとの関わりや遊び自体を楽しんでいると認識していたものと考えられる。ウルトラマンクラブ終了後の自宅での様子では、熟睡出来ることや家の手伝いを進んでしてくれることがあげられていた。したがって、本活動は家庭での生活の質の向上にも役立っていることが窺える。

ウルトラマンクラブで遊んだことについて話をすることもあげられていた。子供は自分のやったことをイメージとして思い浮かべる能力が身についてくると、それが精神発達を大きく飛躍させる土台となる（村田, 2016）と指摘されている。そのため、運動を中心とする自由遊びの場において、学生トレーナーや他児と一緒に運動を楽しんだ体験は、自分のやったことをイメージとして思い浮かべる能力を高め、精神発達を伸ばすように作用しているものと推察される。

保護者は、学生トレーナーが対象児にも兄弟姉妹にも遊び方を教えてくれる等、温かい関わりのおかげで楽しく参加できている。対象児と兄弟姉妹も一緒に遊ぶことができ、自由に遊べる場が子供にとっても親にとっても生活の質を高めているようである。療育センターでの療育から小学校での集団生活につながる活動としての役割も大きい。保護者同士の情報交換ができる場でもある。これらより、子供と保護者の居場所として大切な場で、回数を増やして継続してほしいとの要望が強い。

児童福祉法「第六条の三」第2項で「この法律で、放課後児童健全育成事業とは、小学校に就学している児童であつて、その保護者が労働等により昼間家庭にいないものに、授業の終了後に児童厚生施設等の施設を利用して適切な遊び及び生活の場を与えて、その健全な育成を図る事業をいう。」、「児童福祉法第六条の二の二」第4項で、「この法律で、放課後等デイサービスとは、学校教育法（昭和二十二年法律第二十六号）第一条に規定する学校（幼稚園及び大学を除く。）に就学している障害児につき、授業の終了後又は休業日に児童発達支援センターその他の厚生労働省令で定める施設に通わせ、生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進その他の便宜を供与することをいう。」と規定されている。

発達障害児の学校後の居場所として、放課後児童クラブや放課後等デイサービスが増加しているにもかかわらず、ウルトラマンクラブへのニーズがあるのは、子供と保護者の居場所としての性格が大きいと考えられる。運動を中心とする自由遊びの場は集団心理療法の場でもある。他児と関わり、他児の行動を目のあたりにし、自らの行動がどのような影響を他児に与えるのかを実際に体験する。自分が考えたこと、感じたこと、見たこと、聴いたことが相手である他児の実際の体験とどのように一致するのか、食い違うのかを直に経験することができ、他児と関係性が育まれていく。自らのペースで参与し続けることができる配慮が必要で、プログラムに参与し続けると言うことは他児との関わりが持続するということにつながる。セラピーの場そのものに他者との自然な文脈で、心地よく関わることのできる居場所の機能が必要である（遠矢・針塚, 2011）。さらに、発達障害児の心身の健康を支えることは、その家族や関わる人々の健康を促すことにもつながる（奥田・尾野, 2019）と言及されている。これらより、運動を中心とする自由遊びの場は、参加する子供や大人全員の居場所としての機能を果たし、さらに、子供に限らず、その家族や学生トレーナーの健康を促す側面もあることが考えられる。

2年以上参加している対象児の保護者には、昨年度に比較すると集団での運動遊びが増えたこと、ドッジボール等のルールを理解して遊ぶようになったこと、学生トレーナー・子供達と一緒に遊ぶことが増えたこと、ウルトラマンクラブ終了後自宅で、ウルトラマンクラブで遊んだことや楽しかったことを話してくれるようになったこと、との記述が多かった。また、生活において見通しを立てた筋道だった行動ができる支援やトラブルがあった際に人間関係を調整する支援を求めているが、子供達だけでなく、学生トレーナーとも一緒に遊ぶことで遊びが広がることも記述されていた。

自閉症児に対しては、オープンで自己防衛をする必要がなく、コミュニケーションを自由にとれる環境が重要である（Morgan, Donahue, 2020）。また、人間は心理的に独立した存在であることを自覚すること、他人とのかかわりの中で生活していく存在であることを知ることが、社会的人間として育っていくうえで必須のことである（村田, 2016）と論及されている。つまり、他児と遊ぶようになったり、楽しかったことを保護者に話ができるようになったりすることは、社会性が育っていることを表しているものと考えられる。

5. 結 論

本研究では、発達障害児の運動を中心とする自由遊びの場に対する保護者と学生トレーナーの認識について検討した。その結果、①学生トレーナーは対象児がどのような遊びに関心を向けているのかを観察しながら働きかけている。②学生トレーナーや他児と一緒に運動を楽しんだ体験は、やれたことをイ

メージとして思い浮かべる能力を高め、精神発達を伸ばす。③本活動には子供と保護者の居場所としての性格と集団心理療法の要素がある。④本活動は参加者全員の居場所の機能を果たし、子供と家族や学生トレーナーの健康を促す。⑤本活動によって対象児は他児と遊ぶようになり、楽しかったことを保護者に話す等、社会性を育てるように作用する。以上が考察された。

謝 辞

本研究に際し、発達障害児の運動を中心とする自由遊びの場（ウルトラマンクラブ）に関係されている皆様にご協力いただきました。感謝申し上げます。

引用文献

- 小林隆児（1999）自閉症の発達精神病理と治療．岩崎学術出版．
- 松山郁夫（2013）発達障害児に対する参与観察によるソーシャルワーク演習．佐賀大学文化教育学部研究論文集，18(1)，165-172．
- 松山郁夫・中島範子（2016）発達障害児に対する支援体験を通した学生の気づき．佐賀大学教育実践研究，(33)，141-150．
- 松山郁夫（2017）自閉症児の表象能力と運動を中心とする自由遊びとの関連．佐賀大学大学院学校教育学研究科研究紀要，(1)，81-89．
- 松山郁夫（2019）重度知的障害児の適応行動に着目したトレーナーの支援．佐賀大学教育学部研究論文集，3(1)，95-102．
- 松山郁夫・中村理美・永富達也・井上伸一・坂元康成（2020）発達障害児の運動を中心とする自由遊びにおける支援の意義．佐賀大学教育実践研究，(38)，21-30．
- Morgan, L., Donahue, M. (2020) Living with PTSD on the Autism Spectrum. Jessica Kingsley Publishers.
- 村田豊久（2016）新訂自閉症．日本評論社．
- 奥田訓子・尾野明美（2019）発達障害児への健康支援活動の紹介—運動，食行動，対人関係の3つの課題からの検討—Journal of Health Psychology Research 31(Special issue)，245-252．
- 遠矢浩一・針塚進（2011）発達障害児のための集団心理療法．九州大学総合臨床心理研究（2特別），3-10．
- Wing, L. (1996) The autistic spectrum. Constable and Company Limited.